

関白秀吉軍の薩摩侵攻の足跡

－ 関白秀吉軍の薩摩の陣城跡と関白道の考古学的調査 －

新 東 晃 一

－ 論 文 要 旨 －

薩摩島津氏の九州統一という内乱に対し、天下統一を進めていた関白豊臣秀吉の最初の大事業が1587年（天正15）の九州仕置（征伐）とされる「関白豊臣秀吉の九州御動座」である。この九州御動座は、1587年（天正15）3月1日に大阪を出発して7月14日に大阪へ帰着したもので、この間は約5ヶ月間におよぶ。そのうち薩摩侵攻は、薩摩出水の4月27日から川内・宮之城・大口を経て5月27日に水俣へ帰着した1ヶ月間である。

この関白豊臣秀吉の九州御動座は、日本の歴史学上極めて重要な事件であり、多くの歴史研究者や郷土史家によって歴史史料等から論文や郷土誌等に取り扱われ、その歴史的事象の研究は深化している。しかし、これらの歴史学的研究の深化に対し、鹿児島県では考古学的研究はほとんど行われていないといっても過言ではない。

そのような中、鹿児島県では伊佐市曾木関白陣跡の確認発掘調査が2003～2005年（平成15～17）に実施されている。その後、薩摩進攻の関白秀吉軍の基点となる3陣城跡の一つの薩摩川内市の安養寺陣城跡（鉢巻城跡）の踏査を2009年（平成21）2月からは開始し、2012年（平成24）12月現在（138回（日）延人数684人の参加者）、考古学的視野から代採作業を中心とした調査を継続中である。更に並行して薩摩川内市から川内川を北上した関白秀吉軍の侵攻の足跡を文献史料や伝承を基に関白道の踏査を実施している。

関白豊臣秀吉の九州御動座に関わる薩摩侵攻の陣城跡と関白道の考古学的調査は、緒に就いたばかりである。突如として起こった秀吉軍の薩摩侵攻の陣城造営を観察することで、織豊期の陣城造営と薩摩の山城造営との相違点が把握できる可能性がある。関白道の途中の陣跡（宿泊所）や行軍の把握も、歴史学を補完できるものと考えている。

1 関白豊臣秀吉の九州御動座

明智光秀の謀反（本能寺の変）によって天下統一を進めていた織田信長は、1582年（天正10）6月2日に自刃した。直後の6月13日、備中高松の水攻め中の羽柴秀吉は急遽上方へ帰戦して明智光秀を討伐（山崎の戦い）し、事実上天下を統一することになる。

一方、薩摩の島津氏は、1577年（天正5）12月には島津家念願の三州統一を完成し、その後、1586年（天正14）頃までには西九州から東九州へと進攻し、ほぼ九州を制覇していた。

着々と天下統一を進めていた関白豊臣秀吉は、島津氏の九州統一という内乱に対し、最初の大事業が九州仕置（征伐）とされる「関白豊臣秀吉の九州御動座」（第1図）であった。関白豊臣秀吉は1587年（天正15）3月1日に大阪を出発し、5月8日には島津義久を泰平寺で拝謁し、5月26日には島津家臣新納忠元を曾木関白陣で拝謁して九州征伐の終結をみた。この間、約5ヶ月間の「九州御動座」を経て、7月14日に大阪へ帰着した。

この「関白豊臣秀吉の九州御動座」については、日本の歴史学上は極めて重要な事件であり、歴史史料等から多くの歴史研究者や郷土史家によって論文や郷土誌等に取り扱われ、その歴史的事象の研究は深化している。

しかし、これらの歴史学的研究に対し、考古学的研究はほとんど行われていないといっても過言ではない。そのような中で、本県では1993年（平成5）に伊佐市で「曾木関白陣跡の防塁跡」が発見され、2003～2005年（平成15～17）には曾木関白陣跡の発掘調査が実施されている。その後、これに関連して2009年（平成21）2月からは薩摩進攻の最初の基点である薩摩川内市の安養寺陣城跡（鉢巻城跡）の踏査を開始し、2012年（平成24）12月現在で138回（日）延人数684人の参加者を得て、考古学的視野からの関白豊臣秀吉軍の陣城調査は今なお継続中である。

関白豊臣秀吉の九州御動座に関わる薩摩侵攻の陣城跡の考古学的調査は緒に就いたばかりであるが、ここでは安養寺陣城跡（鉢巻城）の踏査成果や薩摩侵攻の秀吉軍の進路（関白道）について見てみたい。このことは一つには、突如として起こった関白秀吉軍の薩摩侵攻の中で関白秀吉軍の陣城造営を観察することで、所謂、織豊期の陣城造営と薩摩の山城造営の相違点をも把握できる可能性が含まれている。関白道については文献史料等の収集と現地の事前踏査中であるが、現在判明している段階の中間報告をしておきたい。

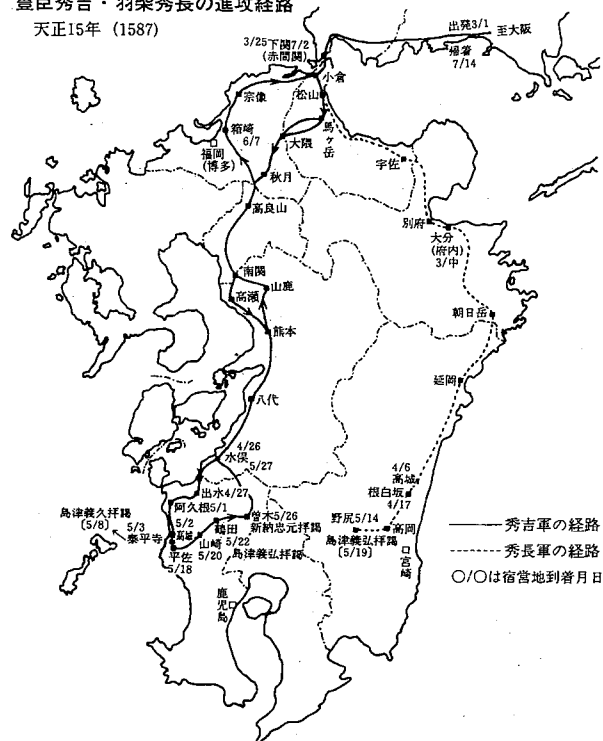
なお、安養寺陣城跡調査はボランティアの有志で行っているが、特に高江在住の家村比呂志氏と伊佐市の大籠洋一氏は調査開始時から主導的に参加されている。その

ほかに薩摩川内郷土史研究会会員の江之口汎生・藤崎琢郎氏、地元高江在住の内山雅雄氏、可愛小教諭の元田順子氏、南さつま市の鮎川哲氏、伊佐市の末原光浩氏、鹿児島市の山村秋廣・有川孝行氏等が常連の参加者である。また、南九州城郭談話会会長三木靖先生には調査開始から御指導を頂いており記して感謝したい。

2 関白豊臣秀吉の薩摩侵攻

関白秀吉の九州御動座は、大坂を1587年（天正15）3月1日の出発に始まる。関白秀吉軍は、下関（赤間関）に3月25日到着し、3月28日に九州に入っている。北九州で豊臣秀吉軍と豊臣秀長軍の二手に分かれ、秀長軍は宇佐から別府、大分（府内）、朝日岳、延岡、高城（4月6日）、高岡、野尻（5月14日）へ到着し、野尻で薩摩藩主島津義久が拝謁（5月19日）して終結をみる。一方、秀吉本軍の進路は福岡松山から大隈、秋月、高良山、南関、高瀬、熊本（隈本）（4月16日）、八代（4月19日）、水俣（4月26日）へと侵攻し、薩摩の出水には4月27日に入っている。そして、阿久根（5月1日）、高城（5月2日）から川内の泰平寺（5月3日）に入り、薩摩藩主島津義久の拝謁（5月8日）で一応の決着をみる。その後、関白秀吉は、着陣前の4月28日に先鋒部隊が大合戦を行った平佐城（5月18日）の検分を行っている。そして関白秀吉は宮之城主島津歳久や大口城主新納忠元に

豊臣秀吉・羽柴秀長の進攻経路
天正15年（1587）



第1図 関白秀吉の九州御動座

不穏な動きがあると察し、川内川を北上して、その後、水俣へ向けて帰還することになる。山崎（5月20日）では、歳久が病とのことで拝謁していないが偵察部隊の小競り合いが記録されている。その後、鶴田では宮崎の飯野から駆け付けた島津義弘が拝謁（5月24日）し、引き続き曾木（新納忠元拝謁）（5月26日）に着陣し、翌日には薩摩路から水俣（5月27日）へ到着したことになる。秀吉の薩摩侵攻は、出水から水俣へ到着するまでであり、丁度1ヶ月間の薩摩滞在になる。その後、八代、熊本（隈本）、山鹿、南関、高良山、箱崎（6月7日）、宗像、小倉、下関（7月2日）の道順で帰軍して7月14日に大坂へ帰着し、約5ヶ月間の九州御動座を終えている。

この秀吉軍の薩摩侵攻の道順については川崎大十氏の研究に詳しいので、これに準じてこれまで調査された歴史的史料や考古学的資料を観てみたい。

3 関白秀吉の先鋒隊の陣城

関白豊臣秀吉の薩摩侵攻の陣城の一つとして、伊佐市（旧大口市）に所在する「曾木天堂ケ尾（関白陣）」跡は著名である。曾木関白陣跡は、関白秀吉の島津氏討伐の最終地として知られており、1993年（平成5）には石塁跡が発見され注目された。標高307mの天堂ケ尾の山頂から約60m下の山腹を巡るように土塁・石塁が残っていた。土塁の高さは約80cm～1m20cm、幅は上部が約1m、底部が約2m、延長は2.3Kmにも及ぶ。一部は崩れているものの大半は石塁で、15～16世紀の中世の面影を残す野面積み技法で築かれている。この発見を期に1995年（平成7）12月3日には伊佐市（旧大口市）の天堂ケ尾関白陣で、南九州城郭談話会の発足会（第1回総会・見学会）を開催した記念すべき経緯がある。曾木関白陣跡は、平成5年（1993）に森林保全事業に伴って陣を守るための土塁や石塁など戦国時代特有の野面積み手法のような防塁跡が発見され、旧大口市教育委員会では曾木関白陣跡調査委員会を発足させ、詳細な現地調査を実施した。その結果、三木靖調査委員長（当時鹿児島短期大学長）は、豊臣側の築城と断定するには、秀吉独自の築城方法が明らかになっている虎口部の考古学調査が必要と提言された。それを受け、大口市教育委員会では、文化庁の国庫補助を受け、平成15年～17年（2003～2005）の3ヶ年間、発掘調査を実施した。ところが、2009年刊行の大口市教育委員会の「関白陣跡」報告書にあるように、この石塁は昭和初年度に牧場建設の遺産であるとの地元の古老による証言が聞き取り調査で判明し、発掘調査で確認された遺構の真偽が危ぶまれている。

その後、筆者は2008年（平成20）11月8日の鹿児島国際大学生涯学習センター特設講座を担当し、薩摩川内市

方面の中世山城見学の際、安養寺城（通称鉢巻城）跡を実見する機会を得た。山城は相当に藪化していたが、大規模な石塁や石垣を草木の中に垣間見ることができた。筆者は曾木関白陣跡との関連性に注目し、この安養寺城跡の城構築技術（石塁・石垣）に曾木関白陣跡の石塁などの構築技術に関連性を探ることはできないかと考え、2009年（平成21）2月14日からボランティアの有志と共に安養寺城跡の踏査を開始した。

関白秀吉軍の先鋒隊（水軍）は、4月24日には関白秀吉本軍より一足早く海路出水へ着き、25日には川内川河口の京泊港に着いている。そして先鋒隊（水軍）は、川内川左岸に、猪子岳、猫嶽、安養寺岡の3陣城を築いている（第2図）。

『三国名勝図会』には、猪子岳は「猫嶽を距ること子方二町程にあり野岡にして猫嶽に相連なり、遙に低し、是また嶺に隄址ありて陣營の所と見ゆ。」とあり、猫嶽は「天正十五年豊関白来て我が境を侵し、軍を是に駐む、既にして水引泰平寺に移て本営とし、此に斥候を置き、諸軍をして平佐城を攻しむ事は平佐邑平佐城址の條に見えたり、巔東西十歩、南北十六歩を削平して遺塹あり…」とある。安養寺岡は「安養寺營 宮里村の内千臺川に沿ふて高阜あり、周廻十町許、登路一町程にして巔平坦なり、豊関白西侵の時、陣営の跡と云伝ふ、昔時寺ありしや、今此辺を安養寺と呼べり」と記載されている。この3陣城跡の猪子岳は民家が集中することや猫嶽は公園化され原形が不明確のため、残りの良好な安養寺岡の踏査を実施することにした。

（1）安養寺陣城跡（薩摩川内市）の踏査

安養寺岡は相当に藪化していたが、大規模な石塁や石垣を草木の藪の中に確認することができた。安養寺陣城

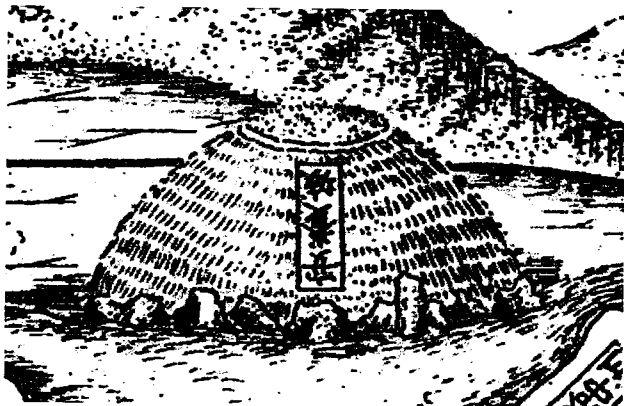


第2図 関白秀吉先鋒隊の三陣城

跡を目の当たりに実見し、この安養寺陣城跡の石塁・石垣等の構築技術から、かつて調査が行われ近時牧場説と混同している曾木関白陣跡の石塁等の構築技術の類似点を探ることはできないかと考え、薩摩川内市の安養寺陣城跡の考古学的な踏査を計画し、調査に取りかかった。

安養寺陣城跡の調査は、2009年（平成21）2月14日から開始し、2012年（平成24）12月10日まで雨天等を除き毎週土曜日に3年11ヶ月、延138回の調査を行い、延684人のボランティアの参加を得て現在継続中である。調査の方法は、地主さんの許可を得て、倒木や枯れ木・竹などの藪等を伐採し、土塁・石塁・石垣等の構築遺構を覆っている枯葉等を箒で清掃した後に平板測量を行うという発掘調査ではなく、基礎的な踏査である。

安養寺陣城（鉢巻城）が登場する主な文献史料は、先の『三国名勝図会』のほか、『聖蹟図志』には「可愛之山稜」絵図の、周辺図中の「河ヨリ南薩摩郡隈城郷」付近に、「安養城」と寺の字を使わず城と記載され、山頂部分に水平の帯曲輪が表現されている。まさに「鉢巻城」である。俗にいう「鉢巻城」の形状である（第3図）。江戸時代末期まで安養寺城の形状（切岸）が見られたのであろうか、注目すべき絵図である。「猫嶽」と「居猫岳」（三国名勝図会では猪子岳）も描かれており、「安養城」と「居猫岳」の三国名勝図会との名称の違いも注目される。『薩隅日地理纂考』には 宮里村「安養寺阜 俗ニ鉢巻城トモイフ 川内川ニ臨メル高阜ナリ周廻十町程高サ六十間余ニテ嶺上平坦ナリ此處関白秀吉公西征ノ時ノ陣營ナリ嶺ニ堀切ノ蹟アリテ遠ク望メハ頭上ニ鉢巻シタルカ如シ因テ俗ニ鉢巻城トイフ昔時此所ニ寺アリテ安養寺トイヒシトソ」と記載されている。『川内市史』には「…、川内川川岸にある猪子岳・猫岳・安養寺岡などに塁を築き、…」と記載されている。『川内市文化財要覧』には「城名鉢巻城、所在地宮里町字安養寺、地形山頂、時代安土桃山（天正15年）、備考に別称「安養寺砦」壕跡有り、陣跡といったほうがよい」と記載されている。また、『鹿児島県の中世城館跡』では「鉢巻城 宮里町字安養寺 山頂200m×350m 遺構腰郭・土塁・折れひずみ・石塁

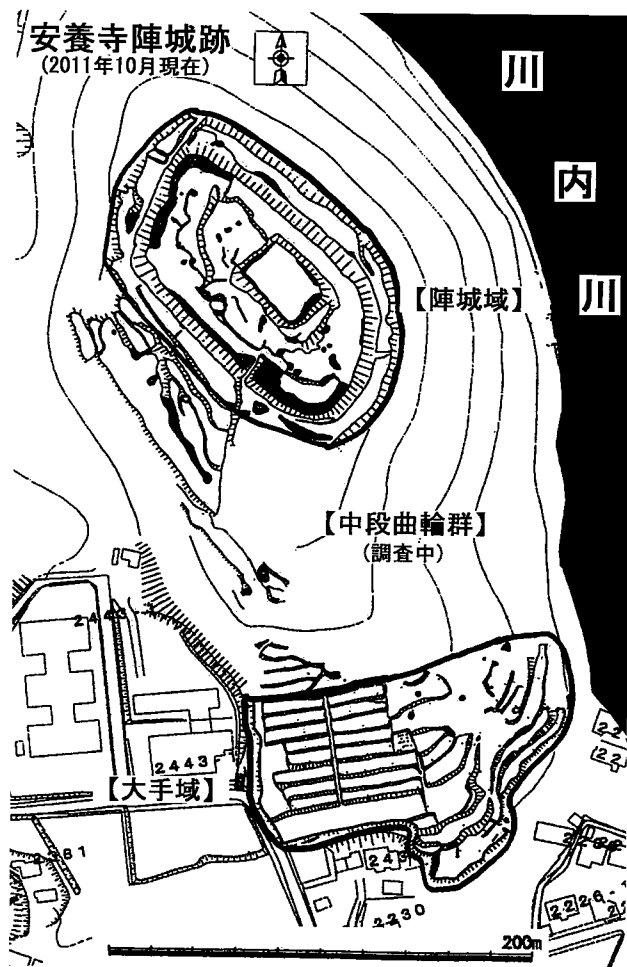


第3図 聖蹟図志の安養城図

（別）安養寺砦」と表に記載されている。さらに『川内の古寺院』では安養寺岳の山裾に安養寺を位置づけているが、添付された字絵図は安養寺岳全体が「安養寺」であり、寺院跡は特定されていない。安養寺の開基は高江正春で、宗派は時宗、寺格は高江氏の菩提寺、創建は鎌倉中期で、院主職は高江氏が継承し、廃寺は高江氏が出水に移った永正年間（1504～1521）と記載されている。

以上が安養寺城及び鉢巻城が登場する主な文献史料であるが、『三国名勝図会』で初めて安養寺宮の城名が登場し、『薩隅日地理纂考』で安養寺阜とされ別名鉢巻城の名称が初めて登場している。それ以後は、鉢巻城の名称が主流を占める傾向にあるが、鉢巻城はあくまでも別称である。城の呼称は宮・阜（おか）・岡と異なるが、『安養寺城』と呼称するのが歴史学上は正当であるところからここでは安養寺（陣）城と呼ぶこととする。

2009年の2月14日からの表面調査は安養寺陣城跡の最頂部の四方に取り巻く石塁跡を遺す曲輪から調査は開始し、最頂部の陣城中心部の伐採・清掃作業は第38回目の2010年4月17日に終了し、以後は、「鉢巻城」の謂れとなった陣城を一周する下段の帯曲輪を北西側から伐採・踏査作業へと移行して11月6日には終了し（陣城域）、続い



第4図 安養寺陣城跡の調査範囲図

で中段部の曲輪群の踏査へと移行した。この中段部は、順次西側曲輪群から下段方向へ踏査を進めた（中段曲輪群）。中段部の西側の踏査がある程度進んだ2011年5月14日に、下段部を散見中、下段部に石垣で構築した入口が存在することが確認された。このため、中段部の調査は一時中断し、下段部の石垣入口付近から下方へと調査を変更した。この下段部には、整然とした長方形の曲輪が10数段構築されている。その最上段の3段には、入口の両脇に石垣を積んだ遺構が確認された。長方形曲輪の東側端には、礎石建物跡が確認されている。東側一帯には、自然地形に沿って段々の普遍形な曲輪が造られている。最下段には、入口と見える石積が確認され、その上段の曲輪の壁面は安山岩が露出しており、石材を掘削した状況であり、石切り場の可能性がある。東側上段の広い曲輪は、石積や石垣を多用し、各曲輪の区切りとしているようである（大手域）。

以下、安養寺陣城跡の説明は、最上段から（1）「陣城域」、（2）「中段曲輪群」、（3）「大手域」の3領域に分けて調査の概要を記載する（第4図）。

（2）陣城域の概要

陣城域は、安養寺の山頂から中腹を廻る帯曲輪までの領域である。最頂部には主郭が構築され、その下段には不変型な添曲輪が存在し、その下段は周回できる帯曲輪となっている。この帯曲輪の縁部の西から南側には石塁が築かれているが、北から東側には石塁はなく直ぐに切岸の壁面となっている。南側の中央にこの上郭の虎口が築かれている。この上郭を取り巻く帯曲輪は、上郭壁面の切岸の削平土の盛り土によって形成され、山頂の陣城を一周している。ただ帯曲輪の北側は堀切状に窪んで自然傾斜面へと続いており、搦手口を築いているようである（第5図）。

主郭の概要

最頂部の方形の曲輪は、規格性があり、主郭にあたる。この主郭の主軸はN-37°-Eの方向で、北北西向きの主軸である。主郭は、長辺34m、短辺24mを測る。4方に石塁を巡らせるが、北東辺の一部と東側の隅部には石塁は無い。石塁の幅は1.5mを測るが、東側の短辺は3mと幅広い。高さは1～0.6mと低い。石塁に囲まれた中央部は水平の平坦面が広がる。おそらく中央を平坦に造成したときに生じた礫塊を石塁に利用したことが考えられる。石塁中から青磁片2点、白磁片1点、瓦器片1点、備前焼片1点の計5点の陶磁器類が採集されている。主郭の登り口は現況では東隅の石塁の欠損している部分か西側の長辺中央部分を想定しているが、発掘調査でないと判明しない。

添曲輪の概要

添曲輪1は、主郭から約1.5m低い位置に略楕円形の平坦面をつくる曲輪である。25m×27mの平坦面をつく

り、西側の側面が若干傾斜している。基本的には土塁・石塁はないが、東側辺と北側辺の一部に石塁状の石積がある。また、平坦面の中央に3カ所石積が築かれている。これも平坦面を造成したときに生じた礫塊の処理手法と考えている。なお、添曲輪の裾側にコ字状の石垣状の石組があり、下段帯曲輪からの登り道の石組の可能性もある。

主郭と添曲輪1を取り囲むように曲輪状の平坦面がつくられ、これも添曲輪と呼ぶことにした。主郭の南側に2カ所と西側に2カ所存在する。添曲輪は、比較的横幅が広く、主郭の補助的役割をなす曲輪と考えられる。これらの添曲輪の中央および端部には石積や石垣状の石組が存在する。これも平坦面を造成したときに生じた礫塊の処理手法と考えている。

上郭を廻る帯曲輪の概要

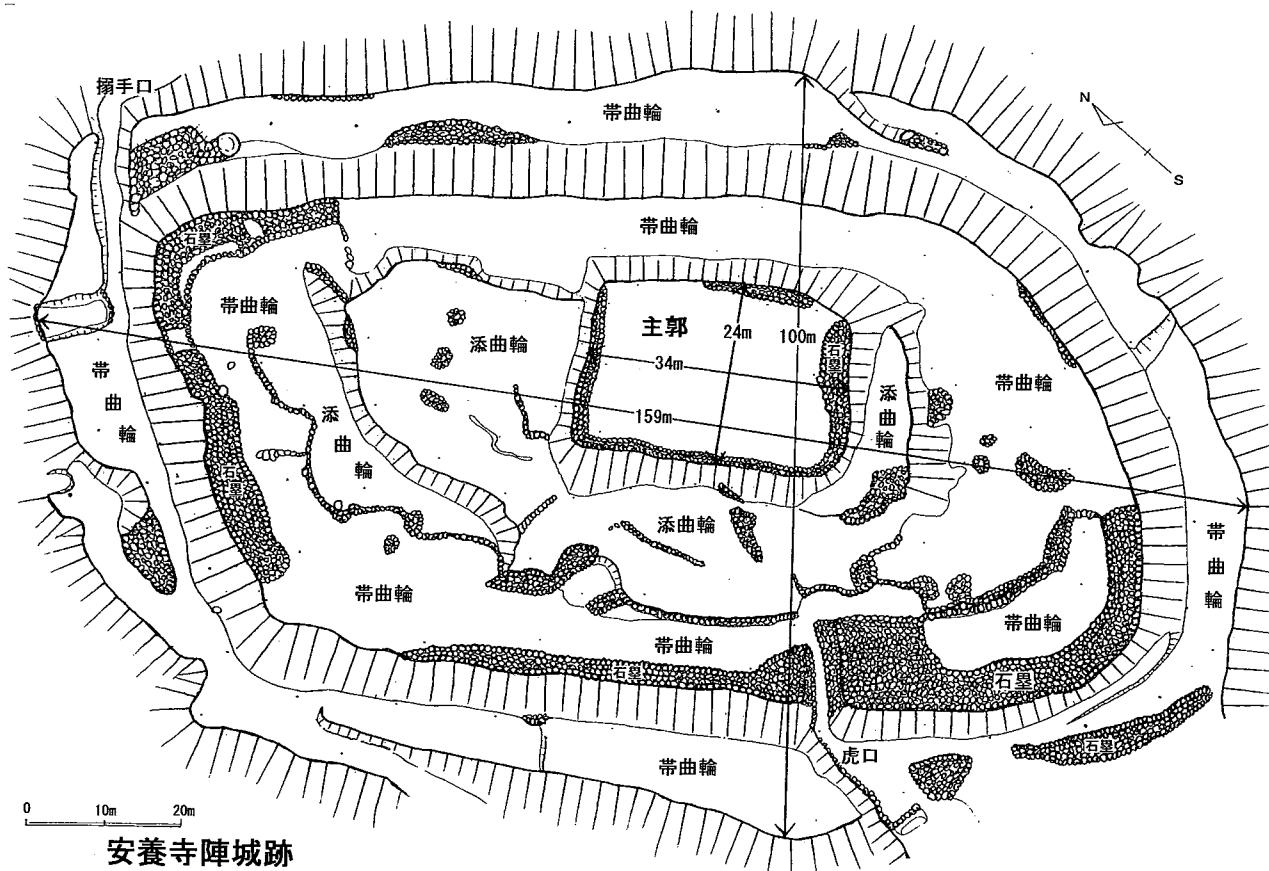
主郭とそれを取り囲む添曲輪の外周には帯曲輪が廻っている。帯曲輪は带状に細長く曲輪の側面もしくは陣城のまわりを囲む曲輪で、当城ではこの帯曲輪までが最上の城域であり、主郭をなす部分と考えられる。そのため南西部には入口である精巧な虎口が構築されている。東側の帯曲輪は、川内川沿いの急壁であり、石塁などは構築されず、直ぐに切岸となっている。おそらく川内川や川内市街地が一望できる方向であり、そのため石塁等は築かなかったことが考えられる。

北側の短辺には幅6m～4mの石塁が廻って構築されている。石塁の高さも最高2mに及ぶ部分もある。石塁の内側の帯曲輪は北に向けて徐々に高く傾斜している。石塁の北側の一部が帯曲輪の高さまで窪んで構築されているが、窪んだ部分は帯曲輪と壁面側には丁寧な土止めの石組が築かれており、帯曲輪の排水施設が設けられたことが想定される。北側の石塁の終わる所には帯曲輪を遮断するように石垣状の石組が組まれている。この石組は曲輪2側が開放され、ここが曲輪2への登り口となっているようである。また、帯曲輪の西側中間にも石垣状の石組があり、石塁側が開放され通路となっている。なお、帯曲輪の排水施設の上方の石塁表面から青磁碗片が採集されている。

西側の帯曲輪は途中（約15m離れて）から幅2m程度で高さ0.5m程度の石塁が築かれて虎口へと続いている。帯曲輪の対面の腰曲輪とは2mからそれ以上の段差があり、添曲輪側には虎口に向けて丁寧な石垣状の石組が築かれている。

南側の帯曲輪は虎口から南側隅にあたる部分で、虎口側面には幅約10mの幅広い石積が築かれている。そこから隅部分にかけては幅5～6m程度、高さ2m程度の幅広く強固な石塁が築かれ、対面の腰曲輪との境壁には石垣や石積で区切られている。この中の帯曲輪とした部分は一段低く特別な施設とも考えられる。

虎口は、南西長辺の帯曲輪の南寄りに作られている。



第5図 安養寺陣城跡の実測図

上幅5m、下幅1mの逆台形状で、すべて石積の精巧な構築である。上段の主要曲輪の出入り口はここだけである。虎口入口付近と上段石垣部分とは4m程度の比高差がある。虎口上手には、石垣状の石積があり、左方の帯曲輪、右方の帯曲輪へと分かれる。虎口前方の石段は若干低くなり主郭下の腰曲輪へと階段状の施設が設けられている。

陣城の城郭を廻る帯曲輪は、上郭を一周する。帯曲輪は上郭の壁面の削平土で平坦面を作り、一周する。所々に削平で生じた礫塊で石積や石垣を設けている。帯曲輪の北、北西、東側の外縁は安養寺山の自然地形の急傾斜となり、人工的な手は加えられていない。そのため、ここまでを陣城域とした。北側隅の帯曲輪は堀切状となって自然傾斜面へ向かっており、ここを搦手口とした。また、搦手口の手前には幅4m×長さ10m程度の縦掘りで深さ0.5mの浅いものであるが、上段曲輪の裾部には幅2mの通路を残して掘られ、崖面には土止め様の中央が低くなった石組で築かれている。上郭からの排水用の施設と考えられる。この上郭を一周する帯曲輪は、聖蹟図志の絵図の山頂にみられる鉢巻で、鉢巻城の俗称となった施設である。

(3) 中段曲輪群の概要

中段曲輪群は、調査の進行上、現在作業途中である。

陣城域から大手域までに当たるが、中央部分は馬の背状にかなり広い平坦面をつくる。陣城下段の北西側はほぼ調査は終了しているが、側縁部分は急な傾斜面に細長い曲輪を作り、石垣や石積で補強している。その3段めの曲輪には、1.7m×2.0mの円形に20個程度の礫で囲った石組炉が検出されている。それ以下の大手域までは作業進行途中であるが、この平坦な中段曲輪域にも複雑な施設が垣間見られるようである。しかし今の段階では後世の畑などへの利用のため発掘調査を行わなければ特定できない。

(4) 大手域の概要

大手域の調査は、階段状に連なる幅約5m程度の長方形の曲輪群の上段3段目に確認された石垣で入口を備えた遺構から下方へ実施し、現在の宅地造成等で削平されている範囲内までを伐採作業で確認した。この大手域の範囲は、西側が整然とした長方形の曲輪群で、東側は自然地形に沿った変形な曲輪群で構成されているという大きな違いの特徴がある。3段の石垣入口は、最上段は長方形の曲輪の側壁も石垣を積んでいるが、それ以下2段は入口の登り道側のみの石垣である。石垣は削平で得られた自然礫で整然と積まれている。5段目の長方形曲輪の東側端には礎石建物跡が確認されている。礎石建物跡は、約10m×10mの方形に平坦に掘られている。西側と

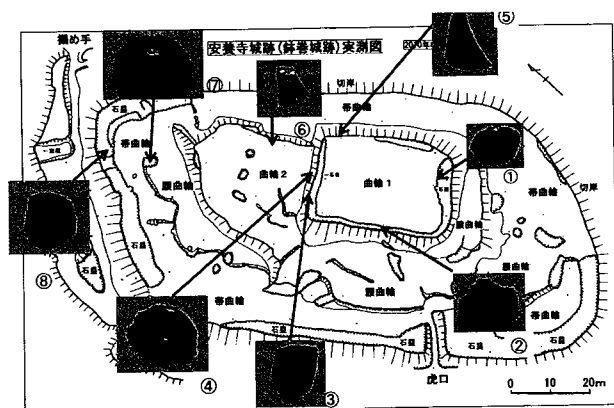
南側の側面は丁寧な石垣で積まれ、北側と東側は堀切壁面である。この範囲内の若干北側寄りに、10個の礎石で2間×3間の配置で礎石建物跡が確認された。西側と南側は丁寧な石垣が積まれ、南側石垣には入口も備えた精巧な建物跡と考えられる。

東側の曲輪群は、自然地形に沿った変型な曲輪群である。特に、下段部分は急傾斜面に帯状の細長い曲輪を造っている。最下段の民家畑地と段境には、辛うじて入口風に積んだ石垣が残っていた。それ以下は民地造成で破壊されており、ここを大手口と想定した。そこを上がった上段の曲輪には石垣状の石積が備えられている。この曲輪の西側奥は一段低くなり、曲輪の北壁面の岩盤の残存状況などから石切り場跡とも推察される。

大手域で判明した石垣入口遺構、礎石建物跡、石切り場？遺構については、安養寺陣城時の構築物か、それ以前の安養寺院時の構築物か、あるいは後世の産物か、伐採作業の踏査では限界であり、時期設定については困難である。

(5) 安養寺陣城跡の採集遺物について

安養寺陣城域の伐採・清掃作業によって、10数点の中世陶磁器が採集されている。いずれも城構築の造成中に石畳や石積に混入したものと想定している。主郭の石畳からは、青磁碗片2点、青磁鉢片1点、瓦質播鉢片1点、備前焼甕胴部片1片の計5点の陶磁器が採集されている。いずれも14世紀後半から15世紀頃の中国産磁器と国内産陶器と考えられる。下段の腰曲輪端の石積と北西端の石畳からそれぞれ青磁碗が1片ずつ採集されている。いずれも14世紀後半から15世紀頃の中国産磁器と考えられる（陶磁器については坊津歴史資料センター輝津館橋口亘学芸員の教示による）。すなわち採集遺物は、出土状態と陶磁器の年代から秀吉軍の安養寺陣城の使用時期



第6図 安養寺陣城跡発見遺物

よりは古く、それ以前の産物の可能性が高い（第6図）。

(6) 安養寺陣城のまとめ

安養寺陣城跡については、史料及び地理的状況からこの地（字安養寺）が安養寺陣城跡に該当する。

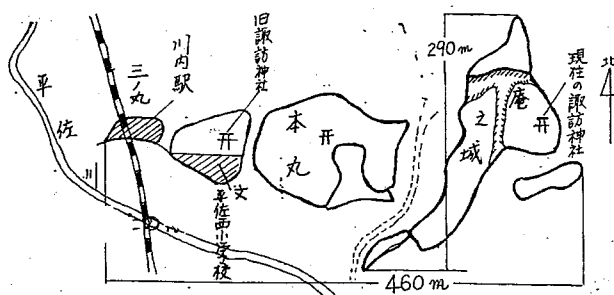
安養寺院と安養寺陣城跡について、安養寺院跡と安養寺陣城跡の構築関係を明らかにする必要がある。安養寺陣城跡の名称は鉢巻城跡とも呼ばれているが、鉢巻城跡は1987年（昭和62）に『鹿児島県の中世城館跡』で使用された名称であり、史料等にみられる「安養寺城（陣・営・砦）」を重視し、今後、正式には「安養寺陣城」と呼ぶのが妥当である。

安養寺陣城跡の踏査について、安養寺陣城跡から採集されている僅かな遺物（陶磁器類）はこれまでのところ14世紀後半から15世紀頃の中国産等のものであり、その年代から秀吉軍の時期より古い。しかも安養寺陣城の構築に伴って、遺物は破損した状態で土塁等の構築遺構に混入した状態で出土しており、明らかに前時期（安養寺院）の産物と考えるのが妥当である。現在行っている踏査では限界であり、正式な発掘調査を行えば秀吉軍の時期の遺構や遺物も限定することができる。

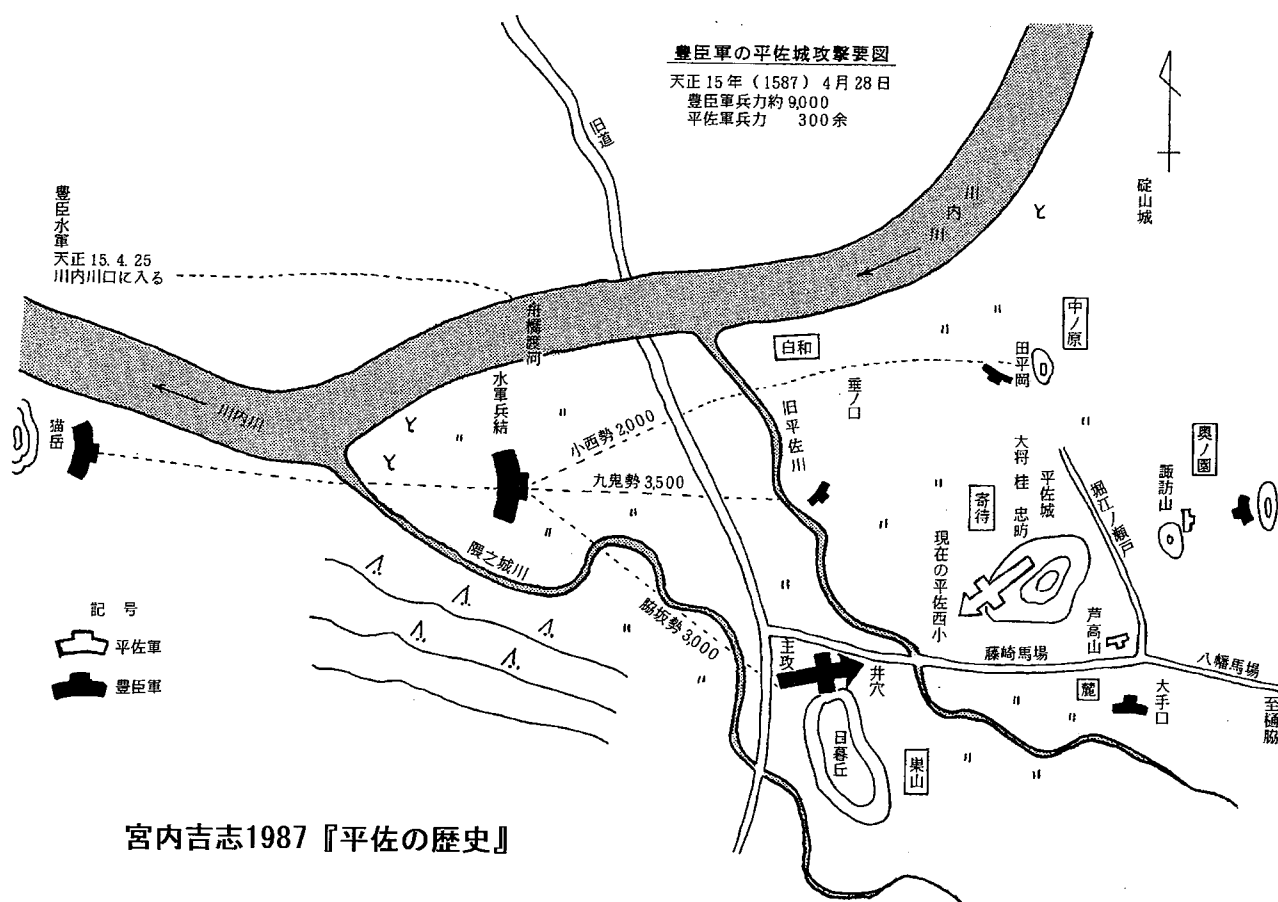
4 関白秀吉軍の先鋒隊の平佐城の戦

関白秀吉軍が薩摩侵攻にあたって、秀吉軍本軍が佐敷に入った頃の4月25日には、秀吉軍の先鋒水軍（小西行長・九鬼嘉隆・脇坂安治ら）は阿久根から川内河口（京泊港）に達し、船舶を繋ぎ、軍需品や食糧を調達して川内川上流左岸の高江の猪子岳、宮里の猫岳・安養寺岡に陣城を築いている。その後、秀吉本軍は、高城（5月2日）から泰平寺（5月3日）へ入り、泰平寺を本陣とした。

この関白秀吉軍の着陣以前に島津軍の本陣である平佐城との大合戦「平佐城の戦」がある。平佐城の戦については、『鹿児島県地誌』下には「…天正15年豊太閤西征ノ時桂神祇忠防平佐城ニ據り固く守テ降ラズ城兵僅ニ三百小西行長脇坂安治九鬼嘉隆等大兵ヲ率ヒ来リ囲ム城兵奮戦死傷頗ル多シ…」とある。また、昭和12年には福田信男氏は平佐城の詳細な記録と平面図を示しているが、これが平佐城の唯一の城縄張図となっている（第7図）。現在の平佐城域は市街地の中心のため、僅かに痕跡を留めている状況である。すでに福田氏は昭和12年頃の時点で、平佐城跡の破壊状況について次の様な警告



第7図 平佐城跡縄張図（福田信男作製）



宮内吉志1987『平佐の歴史』

第8図 平佐城合戦図 (宮内吉志作製)

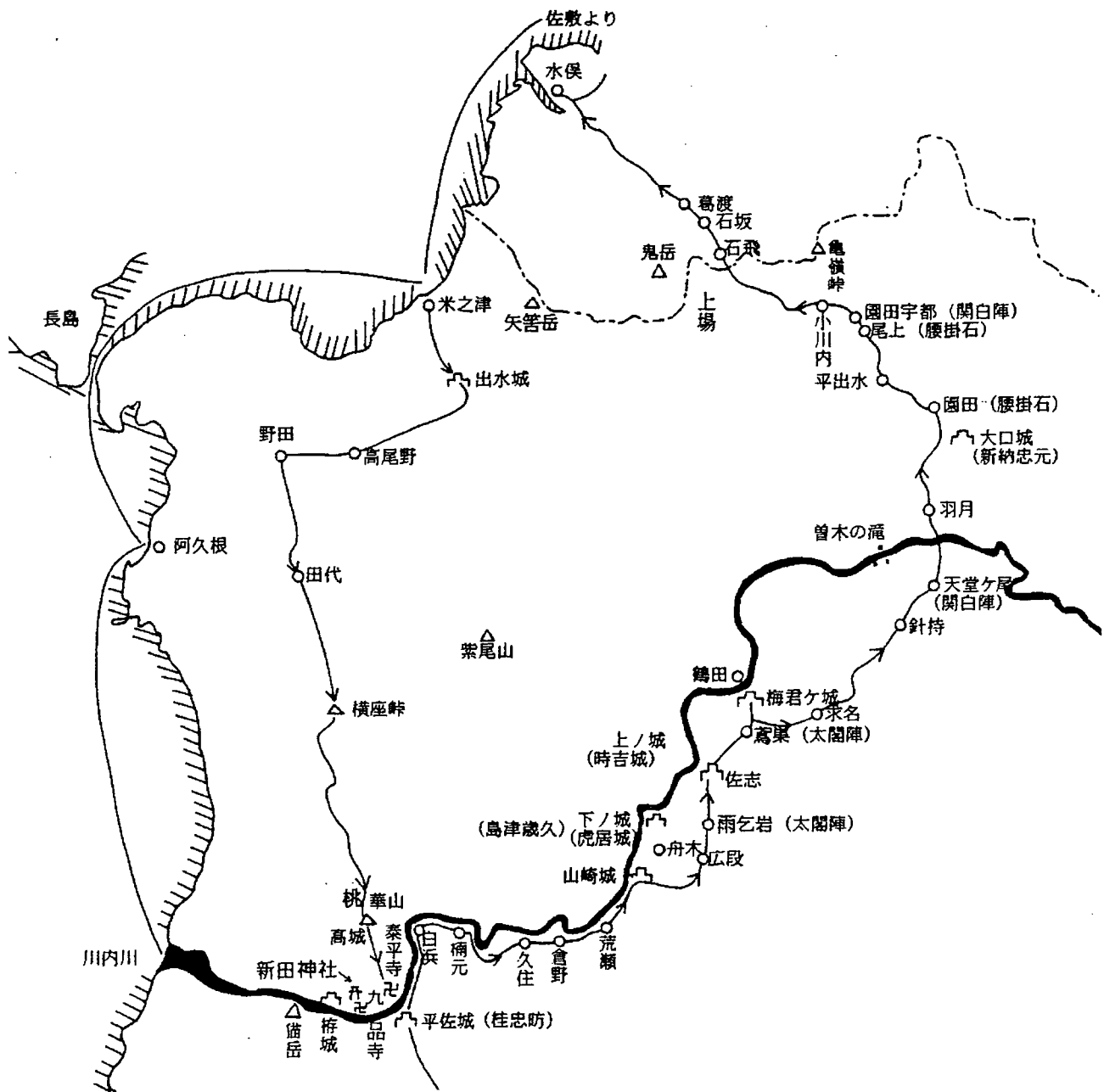
の文章を記載されている。そのために「薩摩郡に於ける古城址の調査」を徹底して行われた熱意が窺われるのである。福田氏は「平佐城が市街地に近接する事と土質が崩壊し易く砂取りに適する事のため年々其の原形を失ひつゝあるは史蹟保存のため惜しむべき事なり。而してその今日の如く大破損を蒙りしは大正年間鉄道開設のためにして破壊以前の状況を目撃せし人は甚だ多く生存せる筈なり。故に是等目撃者の記憶の失せざる間に徹底的に調査して復原図を作製し或は模型を作り置くことは喫緊の要事なり。今回の調査に於いてその茲に及ばざりしは遺憾なれども郡内一円の古城調査の方針に束縛せられて余白なきを恨みとす。」と述べている。76年も経過した現在の状況は更に破壊が進み、現状は福田氏の実測図からは程遠い現状となっている。曲がりなりにも文化財保護を目指した一人として反省の至りであり、今後もこれまでの研究を紐解き現状の保存に努めなければならないことを痛感する。

この戦に関しては、宮内吉志氏の『千台』第16号や『平佐の歴史』に詳しく論じられている。宮内氏によると、猪子岳、猫岳・安養寺岡などに布陣した秀吉軍の先攻水軍は4月27日に新田宮菩提寺九品寺を本営とした。28日払暁、小西行長を総大将として、脇坂安治勢3,000が大

手口井穴方面から、九鬼嘉隆勢3,500が樋之口(樋之口)方面から、小西行長勢2,000が城北(田比良)から総兵力約9,000人で平佐城包囲の陣形をとった(第8図)。守る平佐城軍の兵力は300余人で、秀吉軍の勢力は実に30倍であった。平佐城の兵力は弱小にも拘らず攻防戦は休戦状態になったが、翌29日藩主島津義久の命で降伏し攻防戦は終了した。平佐城守兵の勇戦奮闘と豪勇城主桂忠防の卓抜な戦術の然らしめるところであった。この平佐城攻防戦は秀吉の川内到着以前であり、既に決着が着いていることになる。関白秀吉は北上するにあたり、5月18・19日、平佐城の備えを検分するため幕僚を従え訪れた。平佐城の防備の余りにも単純なのに一驚し、城主桂忠防の奮闘を激賞したという。

5 「関白道」の調査

関白秀吉は、本陣の泰平寺に5月3日に着陣して17日までの15日間逗留している。翌18日～19日には平佐城の検分のため2日間滞在している。その後、山崎、鶴田、曾木と川内川に沿って北上して進軍している。理由は、藩主義久公家臣の虎居城(さつま町)の島津歳久と大口城の新納忠元が降伏の様子が窺われないことからこの道



第9図 秀吉軍の薩摩侵攻図 (川崎大十作製)

程で水俣への帰路に向う形になったようである。この秀吉軍の進軍の道程を「関白道」と称して、安養寺陣城跡の調査と並行して事前調査を進めている。また「太閤道」とか「太閤陣」という名称が歴史史料に登場するが、秀吉は、1591年に養子秀次に関白職を譲り太閤となっている。この秀吉の九州御座座の時点では関白職であり、「関白道」の名称を使うことにした。関白道の名称は『三國名勝圖會』の巻之17に「関白道」の項があり、それに従った。

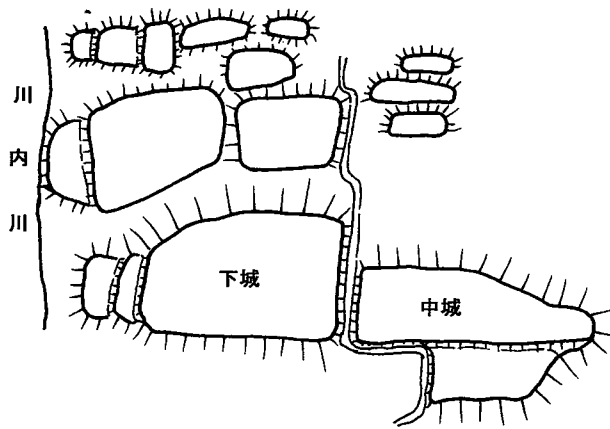
平佐城を發った関白秀吉軍の道程については、川崎大十氏の論文「秀吉の征西」(昭和63年『千台』第十六号)に詳細に記述されている。これに従って事前調査を実施

している(第9図)。

(1) 秀吉軍、山崎城へ(5月20日～21日の2日間逗留)

秀吉軍は5月20日に平佐城を發ち、川内川左岸沿いに白浜・楠元・久住・倉野・荒瀬を経由して山崎城に到着している。この山崎城跡とその付近は、今のところ未調査であるが今後踏査する予定である。

山崎城は、『薩隅日地理纂考』に「山崎城 天正十五年丁亥五月關白秀吉公平佐城ヲ發シ坂陣ノ時川内川ヲ廻リ當城ニ入ル時ニ島津歳久居城宮之城ノ形勢ヲ窺シカ爲ニ軍士五十二騎宮之城ニ入ル歳久ノ歩兵二騎ヲ討取り殘兵山崎ニ走ル此ノ事宮之城ノ巻ニ云リ山崎マテ宮之城ヨリ一里平佐城ヨリ凡四里ナリ」とある。



第10図 山崎城跡 (鮫島富士夫作製)

福田信男氏によると山崎城の現状が記載されている。実測図は掲載されていないが、「全部森林にて蔽はれ深さ十米位の深き堀切りにより東西の二郭に分たる。西の郭は広き平坦面をなす。もと畑に開墾されたる由なるも今は植林となれり。径四十糎位の石数個点在す。西方及び北方の側面に小段のある外概ね断崖なり。東の郭は幅狭く東に延び其の南北の両側に狭き段あり。東の郭の東端は急に下りて細き尾根となり北東に走る。この尾根中堀切の状況は未踏査なり。西の郭の南北の山麓には広き段ありて畑となれり。中央堀切の入口屈曲せるは興味のある所なり。」と当時の踏査状況が記されている。山崎城跡の現況図については、昭和59年の「鹿児島県の中世城館跡」調査時の鮫島富士男氏の調査表の記録がある(第10図)。

関白秀吉の山崎城着陣は、虎居城に居城する島津歳久討伐のためであった。その件は『薩隅日地理纂考』「虎居城」に「…同十五年五月豊太閤水引泰平寺ノ營ヨリ軍ヲ旋シ山崎城ニ入り當城ノ形勢ヲ窺シカ爲ニ軍士五十二騎當郷諏訪ノ原ニ來ル歳久の歩卒馳進シテ騎馬ノ士六騎ヲ斬ル殘兵山崎へ走ルヲ遂テ牛ノ渡リ瀬ニ至ル殘兵地理ヲ熟セス深沼ニ陥リ或ハ馬ヲ斷崖ニ馳落シ散々ニシテ本陣ニ退ク歳久諸臣ヲ集メテ關白ノ威風草ノ偃カ如シトイエトモ歳久ニ於テハ更ニ恐ル、事ナシトテ郭外ヲ固メ態ト九尾今九尾ハ鉾ノ尾トモイヘリ宮之城佐志村接界ノ所ニアリ山崎ヨリ鶴田ヲ經テ爰ニ出ツノ險阻ヲ關白ノ通路トナシテ少モ動揺セス又家臣本田四郎左衛門九尾ノ山中ニ伏シ關白ノ乘輿ヲ射ル六矢ヲ發ツトイヘトモ恙ナクシテ從者創ヲ蒙ル關白當城ノ界ヲ過キテ鶴田ニ宿ス其後歳久關白ノ爲ニ自殺シ領地除セラル…」とある。『薩隅日地理纂考』に関連の記事として山崎城の北の岡に秀吉の幟旗を立てた場所を「旗ノ尾 豊關白此所ヲ通行ノ時旗ヲ留メシ跡ナルカ故ニ名ヲ得タリトゾ其跡今猶殘レリ」と云われ、秀吉勢の偵察隊歳久の兵に襲われた「諏訪ノ原 此所ニテ島津歳久歩兵豊關白從軍ノ騎兵六人ヲ討捕

シトイフ事…」、道に迷って数騎が討ち死にした「牛渡瀬 舟木村ノ中ニテ小川ナリ下流ハ川内川ニ入ル歳久ノ歩兵豊關白ノ斥候五十二騎ヲ追入レシ跡ナリトイフ此外古城跡數ヶ所アリトイヘトモ事蹟詳ナラス」との記載もある。

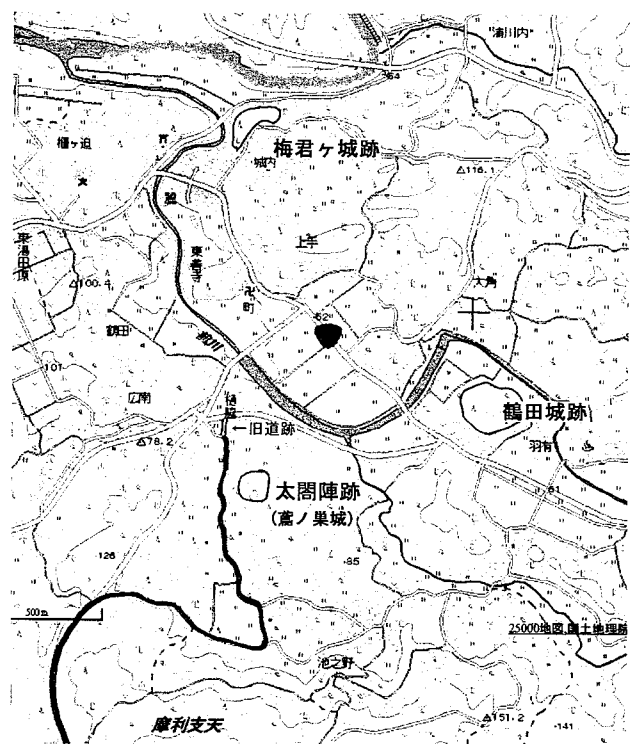
ここでは歳久は病と称し秀吉への拝謁していないが、その後の秀吉の下知により歳久は自刃に追い込まれたとされている。その後秀吉軍は川内川を北上する。

(2) 秀吉軍、鶴田 (5月21日～25日) から求名へ

関白秀吉軍は5月21日夕刻山崎城を發ち、九尾(鉾之尾)に入り広段(太閤ヶ丘)に野營し、佐志を通り鶴田の鳶ノ巢(太閤陣)に22日から宿したと伝えられている。

さつま町の郷土史家中原光明氏の案内で末原光浩・大籠洋一・新東の4人で2012年5月3日、秀吉軍が通ったと伝えられる順路を踏査した。立野道から広段へ、そして早谷(そたい)の池へと山岳の山道行軍である。そして眼下の丘に野營したと伝えられている。ここは未踏査であるが、太閤陣(古陣)が丘(標高296m)と呼ばれている。翌日、太閤陣が丘を降り、急な谷間の小道を通り高祖へ、ここの川内川の支流の穴川を渡る。ここが滑渡瀬と呼ばれている。ここで、島津歳久の命を受けた家臣本田四郎左衛門が秀吉の駕籠を狙撃するが失敗したという伝承が残っている。その後、赤道(佐志)を通り、十文字が岡を経て池之野から鶴田の太閤陣(鳶ノ巢)へと進軍している(第11図)。

22日夜刻、秀吉軍は鶴田の鳶ノ巢(太閤陣)へ到着し、



第11図 鶴田の太閤陣跡位置図

25日までここに滞在している。なお、秀吉の先鋒軍は24日には曾木天堂ケ尾に着陣している。この鳶ノ巣（太閤陣）で、宮崎飯野から馳せ参じた島津義弘は関白秀吉に拝謁し、義弘に大隅国を、その子久保に諸県郡を安堵されているようである。

十文字が岡から池之野、鶴田の鳶ノ巣（太閤陣）、そして歳久のもう一つの居城である梅君ヶ城の踏査を地元の井上武則・中原光明氏の案内で末原光浩・新東の4人で、2012年10月28日に踏査を行った。特に鳶ノ巣（太閤陣）は、山頂は平坦に築城され、堀切や帯曲輪が存在しているようである。関白陣の裾部には旧道跡が保存されている。義弘との拝謁などでも注目される陣跡で残存状況も良く、次の調査の第一候補と考えている。

鶴田の関白陣（鳶ノ巣）については、『薩隅日地理纂考』に「鳶巣壘 大関秀吉公陣營ノ跡ニテ俗ニ関白陣ト號ス天正十五年泰平寺ヨリ販軍ノ時此所ニ宿ス島津義弘飯野ヨリ來リテ公ニ謁ス宮之城街道ヨリ東四町許ニテ高原ナリ縦横十余間ヲ四方ヲ遠望ス諸所ニ堀切ノ址遺レリ」と記載されている。

秀吉軍は26日に鶴田から求名を通り、曾木関白陣へ到着している。求名から橋掛の関白道調査は、2012年5月3日に求名在住の松元美好・紫尾田巖・松下英夫・吉国健一郎・谷山武則氏らの案内で、伊佐市の東哲郎氏、安養寺城調査団の末原光浩・大籠洋一・新東の9名で実施している。松並木や旧道跡などの伝承地や実際に切株の樹根が現存している並木路跡、秀吉軍の騎馬用の水飲み場と伝えられる池など案内していただいた（第12図）。この旧道は肥後街道や球磨街道と呼ばれる人吉相良・菱刈氏支配時から伊佐と宮之城を繋ぐ旧街道であり、秀吉

軍もこの街道を通過したと伝えられている。『鹿児島縣地誌』下には宮之城街道として「宮城街道 縣同三等二属ス村ノ西鶴田村ノ界ヨリ東菱刈郡針持村ノ界道長壺里拾五町幅貳間松の並木アリ支道ニアリーハ村ノ中央元原ヨリ東永野村ニ通シーハ司所ヨリ西廣瀬村ニ通ス」と記載され、松並木で整備された重要な藩路でここを秀吉軍は通ったと考えられている。

橋掛から曾木天堂ケ尾（関白陣）までの調査は、2012年1月22日と29日に地元の原口宗雄・瀬戸口照記・東哲郎氏の案内で末原光浩・末原俊幸・大籠洋一・新東の7名実施した。新道で切られたり拡幅された部分もあるが、大方伝承されている旧街道は踏査することが出来た。

（3）秀吉軍、曾木堂ケ尾（関白陣）へ

秀吉軍は、5月26日に鶴田から求名を経て曾木天堂ケ尾（関白陣）へ到着している。そして夕刻には、大口城主新納忠元は曾木天堂ケ尾で秀吉に拝謁して薩摩征西の行軍は事実上終了している。

幾つもの文献史料の中で、特に「三国名勝図会」では幕末の詳細な記述があり、この地が秀吉の陣営跡であることが判明している。「三国名勝図会」には、「此宮址東西拾四間、南北三十七間を削平し、石垣所々に残れり、其中に方五尺許り、土を築きて、傍らに松樹一株を栽たり、是関白の乗輿を安措せし處なりと稱ず、その南五拾間許りなる、原野の平地に二箇所土を築けり、當時從軍將士の營跡なるべし、又同方六拾餘間を距り、清泉の流れありて、四時水勢盛なり、軍兵用水とせしならん」と記載されている（第13図）。

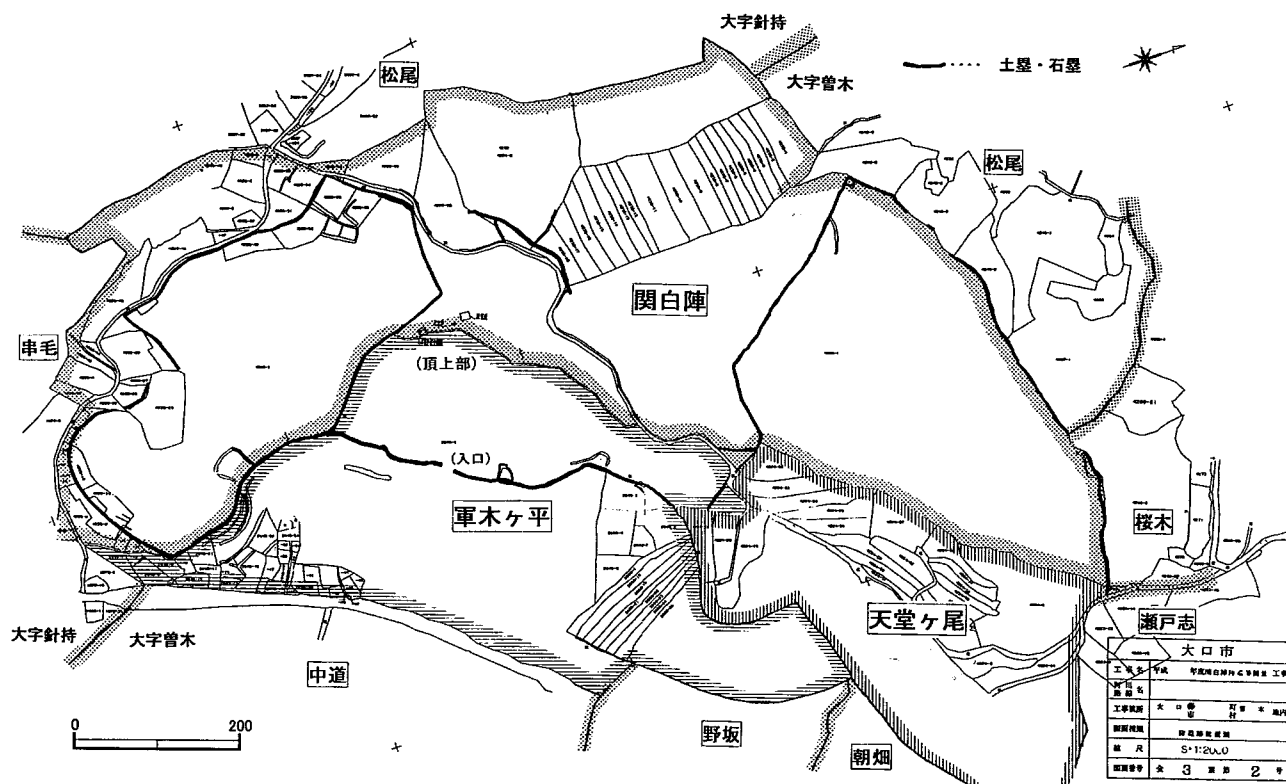
曾木関白陣跡は、平成5年（1993）に森林保全事業に伴って陣を守るための土塁や石塁など戦国時代特有の野面積み手法のような防塁跡が発見され、旧大口市教育委員会では曾木関白陣跡調査委員会を発足させ、詳細な現地調査を実施した。その結果、三木靖調査委員長（鹿児島短期大学長）は、豊臣側の築城と断定するには、秀吉独自の築城方法が明らかになっている虎口部の考古学調



第12図 秀吉軍の進軍想定図



第13図 曾木関白陣（三国名勝図会）



第14図 曾木天堂ヶ尾（関白陣）の土塁（石塁）範囲図と字名

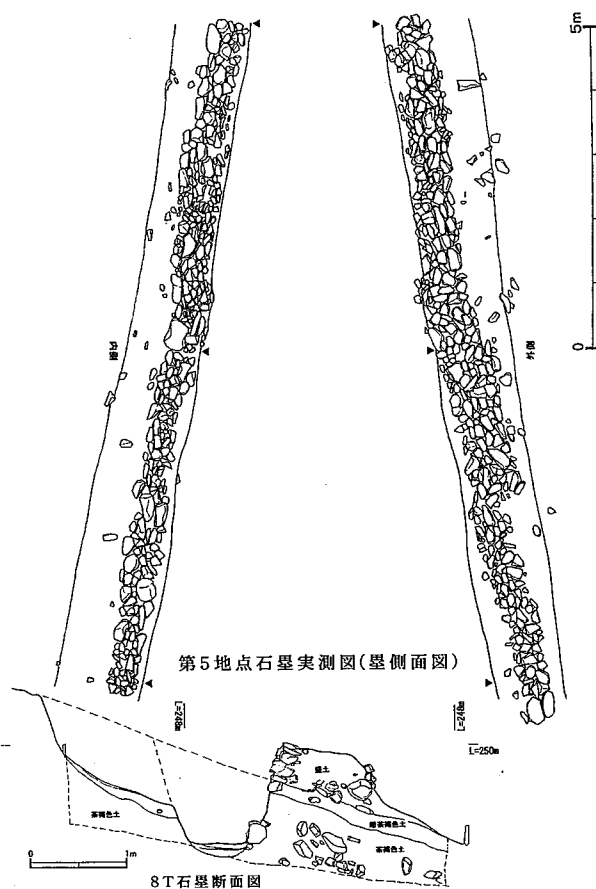
査が必要と提言された。それを受け、大口市教育委員会では、平成15年～17年（2003～2005）の3ケ年間、発掘調査を実施した。

平成15年度の発掘調査は、第1地点（最頂部【主郭】南側の1T・2T）の空堀・土塁の調査。第2地点（第1地点から続く3T）の空堀・土塁の調査。第3地点（第2地点から続く4T・5T）の空堀・土塁の調査。第4地点（最頂部【主郭】東側裾部の6T・7T）の虎口部分の空堀・土塁の調査が行われている。

平成16年度の発掘調査は、最頂部【主郭】平坦部の調査が行われている。

平成17年度の発掘調査は、第5地点（第3地点から続く8T・9T・10T）の空堀・土塁の調査。第6地点（第5地点と第1地点、第4地点の虎口へ続く11T）の空堀・土塁の調査。湧水地点（12T）の湧水井戸の調査と3カ年の調査の報告者作製が行われた（第14・15図）。

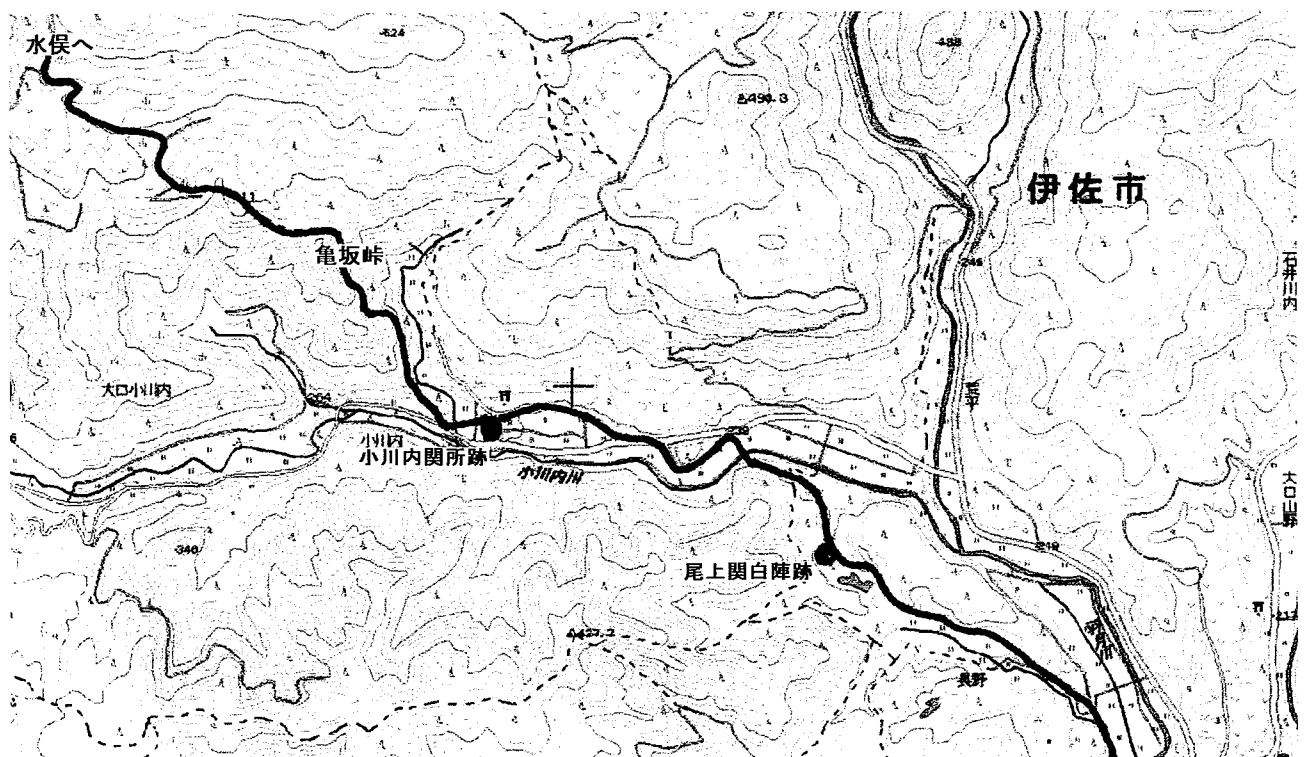
関白陣跡の事前調査及び確認発掘調査においては空堀・土塁・石塁・暗渠施設・虎口・湧水井戸施設等の遺構が発見され、一応の成果が得られた。しかし、調査中・調査後に複数の地元古老からこれらの施設は昭和初年代（4年～6年）に築かれた牧場説が浮上している。大口市教育委員会では、平成15年～17年の調査報告書をまとめるにあたり5人の古老から克明な聞き取り調査を行っている。そして、発掘調査担当者は報告書の「まとめ」の中で忠実に記述している。それは昭和初年頃の牧



第15図 曾木関白陣の石塁実測図



第16図 曾木関白陣から関白道の順路



第17図 尾上関白陣と小川内関所と帰軍順路図

場建設の伝承であり、発掘調査の陣城跡遺構と牧場跡の重複の問題である。

その伝承は、山の斜面に溝を約2尺(約60cm)掘り、高さ5尺(約150cm)、幅3~4尺(約90~120cm)の大きな土塁を作ったが、土塁は作っただけで使われることはなかった。また、子供の頃馬の放牧場があった。放牧場は土手で囲まれただけで、柵などはなかった。軍馬育成のため、馬の水飲み場があったなどの証言である。

これらの証言から、発掘調査で得られた関白陣の土塁・石塁は現代のものと結論づけている。発掘調査の結果に対して古老の証言はネガティブなものであるが、これらの文献史料等の曾木関白陣の記載や発掘調査で得られた遺構等がすべて現代の牧場跡とは考えられない。是等は入念な精査が必要であり、その結果、現在実施している安養寺陣城跡の調査や関白秀吉軍の薩摩侵攻の足跡(関白道)調査を行っているところである。

(4) 秀吉軍、曾木関白陣から水俣へ

関白秀吉とその軍は、5月27日に曾木関白陣(天堂ケ尾)を発ち、曾木針牟田・川西を経て最も浅瀬の川内川(鈴ノ瀬)を渡り堂崎から鳥巢園田に至っている(第16図)。鳥巢園田には新納忠元の見送りを受けたとされる「秀吉の腰掛石」が口伝として残っている。新納忠元の居城する大口城は川内川向かい側にあり、居城の大口城を通らない道程とされている。ここで忠元は送別の礼を尽くしたが、秀吉は感激して近くに招いて陣扇一柄を与えたと伝えられる。

その先が平出水向江であるが、平出水~上場を通り出水へ出て水俣に達する「平出水上場」説と小川内関所を通り亀嶺峠を越え水俣へ向かう「小川内」説に分かれる分岐点の場所である。『三國名勝圖會』に「關白道」の項目があり、次の様に記述されている。「關白道 天正十五年、五月、豊關白歸陣の時、俄に路を改め、羽月より當邑より平泉村を歴て、上場越を過ぎ、肥後國に出づ、今に是を關白道といふ、上場越は、出水通路なり、上場越を過れば、出水路より北に岐を分ち、肥後水俣に通ずる路あり、此路大口の城下を歴ず、且今の大道小河内關を過て、肥後に通ずるものに非ず、僻路險隘なりぞ、關白此僻路を取て、大口城下の大道を過ぎるは、新納忠元が勇略を憚ての故なりといふ、」とあり、「平出水上場」説として出水から水俣へ帰陣したことになる。しかし「小川内」説のルート上には「扇取岡跡」や「尾上関白陣跡」が存在している。

扇取岡は『薩隅日地理纂考』に「扇取岡附 山下出羽宅址 關白陣ヲ距ル事辰己ノ方三町許ニテ山下出羽清晴太閤ノ行軍ヲ遙カニ見渡シ矢ヲ發チテ鎗印ノ扇ヲ射落ス因テ岡ノ名トス清晴カ居宅ノ址岡ノ上ニアリ」とある。

その先の尾上関白陣は『薩隅日地理纂考』に「關白陣 肥後國ヘノ街道ニテ豊臣秀吉公水引泰平寺ヲ去テ飯陣ノ時ノ陣營ナリ地名ヲ園田ノ宇都ト云フ高原ノ頂上ニ縦横二十余間東南ヨリ西ニ廻リテ土手ノ址アリ北ハ白砂の高崖ニテ下ハ廣沼ナリ」とあり、『鹿児島縣地誌』下には「關白陣 村ノ西岡上ニ在リ豊太閤西征ノ時陣營ノ

址ナリ壘址猶存ス」と記載されている。この関白陣跡は2011年9月23日に成尾英仁氏の案内で踏査を行った。今後、伐採清掃・実測作業を計画しているが、史料にある様に尾根を堀切で切断し、約40m四方に整えた陣跡が確認される。そして東方下には史料にある広大な「大椋の池」が所在している。今、陣跡の中央には村長初め有志の手によって1930年（昭和5）に記念碑が建てられている（第17図）。

その先方には、小川内関所跡が存在する。秀吉軍がこの関所跡を通ったかどうかは史料には見られない。小川内関所については『薩隅日地理纂考』に「小河内關 小河内は地名ナリ此地肥後國トノ界ニテ大道通ス因テ鹿児島ヨリ是ヲ置ク」とあり、『鹿児島縣地誌』下に「古關址 村ノ東ニ在リ鹿児島藩ノ時置ク」とある。小川内関所跡については『大口古事見聞記』（1818～1829年）に享祿（1530年）の頃すでに存在したことが記載され、関所跡南の丘上には関守の墓石群（68基）が発見されている。つまり秀吉軍は山野の尾上関白陣（小憩昼食）を通り、この小川内関所から藩道の鬼嶺峠から肥後路に入り、水俣（午後6時頃）経由で佐敷へ向った可能性が高い。成尾英仁氏の案内で、尾上関白陣は2011年9月23日に、小川内関所より水俣側の踏査は2013年1月20日に行った。

その後、秀吉軍は6月7日に筑前宮崎（博多）に到着し、7月14日に大坂に帰着して九州御勤座を終えている。

6 おわりにあたって

関白秀吉の薩摩侵攻の足跡調査は、曾木天堂ケ尾（関白陣）の発掘調査以後、関白秀吉の先鋒軍の安養寺陣城跡の調査を行いながら関白道としてその足跡調査を行っているがまだ緒に就いたばかりである。関白道の経路については歴史的史料の記載がのこっており、これに考古学的視野からの検討・調査を行うことによって歴史学を補完できると考えている。基地としたあるいは宿泊したであろう陣城跡についてはある程度特定でき、その考古学的調査を順次行う計画である。関白道の経路についてなかなか難しい。中には島津配下の道案内でわざと難所を案内したと云う伝承も見られる。地元に残る伝承の旧街道も、たとえば島津支配以前の人吉相良藩・菱刈氏時

の肥後海道・球磨街道も史料に散見され、現地を踏査すると2間程度の並木道（樹痕）が現存する所も存在する。今回は、これまでの調査・踏査の一応の中間報告としたい。

なお、この調査に当たっては多くの方々の協力・御教示を得た。安養寺陣城跡の調査や関白道の調査についてはそれぞれ項で御芳名を記した。その他に文献史料の解読に始良市歴史民俗資料館の尾口義男館長、行政機関の調整には薩摩川内市教育委員会中島哲郎文化課長、さつま町歴史資料館佐藤真人学芸員、伊佐市教育委員会柿川幸司主査の御協力を頂いた。記して感謝したい。

【連絡先：〒899-5431 鹿児島県始良市西餅田1752-7】

参考文献

- 『大口古事見聞記』（1818～1829年）
- 『三国名勝図会』1843年（天保14）編纂
- 『聖跡図志』1866（慶応2年）版
- 『薩隅日地理纂考』1871年（明治4）編纂
- 『鹿児島縣地誌』下（鹿児島県史料集第17輯）明治15～17年編纂
1884年復刻版
- 福田信男1937（昭和12）『薩摩郡における古城址の調査』
- 宮内吉志1988「平佐城攻防戦について」『千台』第16号 川内郷土史研究会
- 宮内吉志1987『平佐の歴史』財団法人山維持会
- 川内市1971『川内市史』
- 川内市1985『川内文化財要覧』
- 鹿児島県歴史資料センター黎明館1986『昭和61年特別展激動期の島津氏図録』
- 鹿児島県教育委員会1987『鹿児島県の中世城館跡』
- 川内郷土史研究会1992『川内の古寺院』
- 松田・川崎2000『完訳フロイス日本史4』
- 大口市教育委員会2006「関白陣跡・里町遺跡」
- 三木靖2008「島津氏と川内」『千台』第36号 薩摩川内郷土史研究会
- 江之口汎生2012「田原篤実の神代山稜図」『安養寺城通信』118号
- 吉本明弘2012「豊臣秀吉・関白軍の川内侵攻」『千台』第40記念号 薩摩川内郷土史研究会
- 新東晃一2012「関白秀吉軍の薩摩の陣城跡 安養寺陣城跡の調査」『千台』第40記念号 薩摩川内郷土史研究会

